山本周五郎全集

第四巻

山本周五郎全集
第4巻　樅ノ木は残った
昭和38年8月20日　第1刷発行
定　価　560円
著　者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
電話　東京(941)3111(大代表)
振替　東京3930
© Shugoro Yamamoto 1963
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集　第四巻　目次

樅ノ木は残った　五

解説　平野　謙　五七

デザイン　伊藤憲治

撮影　秋山青磁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

樅ノ木は残った

第一部

序の章

万治三年七月十八日。

幕府の老中から通知があって、伊達陸奥守の一族伊達兵部少輔、同じく宿老の大条兵庫、茂庭周防、片倉小十郎、原田甲斐。そして、伊達家の親族に当る立花飛驒守ら六人が、老中酒井雅楽頭の邸へ出頭した。

酒井邸には雅楽頭のほかに、同じく老中の阿部豊後守と稲葉美濃守が列座していて、左のような申し渡しがあった。

「伊達むつの守、かねがね不作法の儀、上聞に達し、不届におぼしめさる、よってまず逼塞まかりあるべく、跡式の儀はかさねて仰せださるべし」

こういう意味の譴責であったが、

「但し堀ざらいの普請はつづけるように」

ということが付け加えられた。

堀ざらいとは、その年の三月から幕府の命令で、伊達家が担当していた、小石川堀の修築工事をさすものである。

申し渡しのあと、太田摂津守が上使を命ぜられ、立花飛驒守と伊達兵部との三人で、伊達家の上屋敷へゆき、陸奥守綱宗にその旨を伝えた。

綱宗はすぐに品川の下屋敷へ移った。

明くる七月十九日の夜。

伊達家の浜屋敷の内にある坂本八郎左衛門の住居へ、二人の訪問者があった。坂本は浪人から取立てられた者で、食禄は六百石、目付役を勤めていた。

坂本は二人に会った。

二人は密談があるようによそおい隙をみて坂本に襲いかかった。坂本は抜きあわせるひまもなく、その場で即死した。二人は坂本の家人に、「上意討ちである」と云って、たち去った。

同じ夜、同じ時刻。

やはり浜屋敷の内にある、渡辺九郎左衛門の住居に、二人の訪問者があった。渡辺も浪人から取立てられた者で、疋田流の槍の名手であり、刀法にも非凡な腕があった。食禄は二百四十石、家中の士に槍術を教えていた。

渡辺は会うのを拒んだ。

訪問したのは渡辺金兵衛と渡辺七兵衛といい、二人とも小人頭であるが、どちらも親しいつきあいはないし、そんな時刻に訪問されるような、用件があるとも思えなかった。

「いや、急用があるのです」二人は取次の者に云った。

「こんど御門札を新しくするので、印鑑をいただきたいの

です、明朝から新しい御門札になるので、ぜひとも今夜のうちに印鑑をいただかなければならないのです」
まえの日に、藩主が幕府から逼塞を命ぜられて、品川の下屋敷へ移った。しぜん門札の更新ということもあり得るので、渡辺は二人に会うことにした。
常着の上へ袴をはき、脇差だけ差し、印鑑の入った鹿皮の小さな袋を持って、渡辺九郎左衛門は客間へ出ていった。二人の訪問者は、膝の前に帳面ようの物を置いて、坐っていた。渡辺はかれらを見たが、二人のようすに変ったところはなかった。
「――御苦労」と云って渡辺は坐った。
「夜分にあがりまして」と渡辺金兵衛が云った。そして七兵衛と共に両手をついて、低く辞儀をした。
渡辺は袋を膝の上に置いた。低く辞儀をした二人の右手は、それぞれの刀をつかんだ。渡辺は袋の口の紐をゆるめ、中から印鑑を出そうとした。そのとき金兵衛が片膝立ちになり、刀をすばやく取り直して抜き打ちに渡辺へ斬りつけた。刀は渡辺の右の肩を斬った。
「なにをする」
渡辺は腰の脇差へ手をかけながら立った。その手には印鑑の袋が絡まっていた。袋の口の紐が指に絡まっていたのである、――渡辺が立ったとき、七兵衛が左から突を入れた。渡辺はとっさに脇差を抜いて横に払った。七兵衛の刀は渡辺の腰を刺し、渡辺の刀は七兵衛の肩を斬った。
「なんのためだ」と渡辺が叫んだ。
そのとき右から、金兵衛が踏み込んだ。そして、腰を刺されて体の崩れた渡辺の脾腹を十分に斬った。渡辺は襖へよろけかかり、襖といっしょに次の間へ転げこんだ。金兵衛は追っていって、もう一刀、頸から胸へかけて斬った。渡辺は「うん」と呻いた。七兵衛は肩の傷を押えながら客間のまん中に立っていた。
そこへ三人の若侍と、一人の若い女が走って来た。侍たちは廊下の左から、――女は奥のほうから走って来て、客間の前で立竦んだ。
「騒ぐな、上意討ちだ」
金兵衛が云った。彼は渡辺九郎左衛門が死んだのを慥かめてから、客間のほうへ出て来た。
「あとから検視が来る、それまで死躰に手を付けてはならない、家の中もそのまま、慎しんで待っておれ」
女が叫び声をあげた。
金兵衛が女を見た。女は十八九歳の、小柄な軀つきで、勝ち気らしい、だが美しい顔だちをしていた。女は金兵衛の脇を走りぬけ、渡辺の死躰のところへいって、死躰にとり縋った。そして声をあげて泣きだした。
「あれはなに者だ」と金兵衛が訊いた。
三人の若侍たちはすぐには答えなかった。しかしようやく、その中の一人が云った。
「側女のみやという者です」
金兵衛は刀を拭きながら七兵衛を見た。
「大丈夫、浅手だ」と七兵衛が云った。そして、二人はた

ち去った。

同じ夜の、ほぼ同じ時刻。

伊達家の桜田上屋敷内にある畑与右衛門の住居へ、三人の訪問者があった。畑は納戸役（禄高不明）で夫婦の間に宇乃という十三歳の娘と、虎之助という六歳の男子があった。訪問者と聞いたとき、畑はふと不吉な予感におそわれた。漠然としたものではあったが、まったく無根拠ではなかった。彼は妻をよんで訊いた。

「子供たちは寝たか」

「はい、寝ております」

「すぐに起せ」と畑は云った、「二人とも起して、おまえ宮本へつれてゆけ、おまえがつれてゆくんだぞ」

「こんな時刻にですか」

「わけはあとで話す、いそいでゆけ」

妻女は立っていった。彼女は子供達を起した。どちらもまだ眠ってはいなかった。虎之助はとび起きて、よろこんで云った。

「どうするの、また遊ぶの」

「静かになさいな」

宇乃がそう云った。宇乃は十三歳であるが、軀つきも大きく、顔もおとなびてみえ、気持もませていた。彼女は母親のようすで、なにかただならぬ事が起ったのだと直感した。それで着替えを終ったときには、もっとおとなびた顔つきになった。

「遊ぶんじゃないの」と虎之助が母親に訊いた。

母親は帯をしめてやりながら「静かになさいな」と云った。虎之助は姉の顔を見て、そして黙った。支度のできた二人をつれて妻女が裏から家を出たとき、客間のほうで高い叫び声と、足踏みをするような物音が聞えた。

「あれ、なに、お母さま」

虎之助が云った。妻女は怯えたように娘の顔を見た。宇乃はおちついた声で、母親をなだめるように云った。

「まいりましょう、お母さま」

妻女は歩きだした。外は暗かった。まっ暗で、爪先も見えないようであった。宇乃はしゃんとしていた、彼女には母親の怯えているのがわかり、自分がしっかりしていなければだめだと思った。

「お母さま、どこへゆきますの」

宇乃が訊いた。母親が答えた。

「え、ああ、宮本さまよ」

「ただゆけばよろしいの」

「あなた、いっておくれか」

母親は家へ戻りたいようすであった。それが宇乃にはよくわかった。宇乃は云った。

「ええ大丈夫よ、お母さま」

「ではそうしておくれ」

母親は握っていた虎之助の手を宇乃にわたした。そしてなにか云いたげに、娘のほうをすかし見たが、虎之助を押しやって云った。

「いっておくれ」
彼女は家のほうへ引返した。宇乃は弟の手を握って、闇のなかを歩いていった。虎之助の手はふるえていた。彼も幼ないなりに、ようやく不安を感じだし、それをがまんしているのだということが、宇乃にわかった。
宮本又市は三百石の無役で、無役のまま藩主綱宗の側近に仕えていた。住居は小者長屋の近くにあった。姉弟が掃除井戸のところまでいったとき、向うから走って来た者があった。足袋はだしだったので、足音が聞えず、宇乃がそうと気づいて、よけようとしたとき、激しく突当たられてよろめいた。
「お姉さま」と虎之助が叫んで、姉にしがみついた。
相手もびっくりしたらしい、脇のほうへよけながら、かすれた声で云った。
「誰だ、――」
宇乃はその声を知っていた。それは宮本又市の弟で、十六歳になる新八の声であった。宇乃は虎之助を抱きよせながら云った。
「わたくしと弟ですの」
「宇乃さんか」新八は喘いで、宇乃のほうへ近よった。
「宇乃さん、貴女の家へゆくところだ」
「わたくしも」
「えっ、貴女も、――」新八が荒い息をした。宇乃が弟をいっしょに出て来たことで、彼には事情がわかったらしい、新八は絶望したように云った。
「ではだめだ、外へ出よう」
「外へですって」
「大変なことが起るらしい、兄は畑さんに知らせて、それから浜屋敷の渡辺さんのところへゆけと云った」
「わたくし弟といっしょですの」
「不浄門から出よう」
宇乃は弟をひきよせた。
「さあ虎之助さん、あたしに負ぶさるのよ」
「いやだ、自分で歩くよ」虎之助は姉の手を拒んだ。
新八がせきたて、いっしょに走りだしたが、すぐに五人の人たちにゆくてを塞がれた。かれらはお厩のほうから来た。提灯を持った二人の小者と、ほかに侍が三人いた。かれらはとつぜんお厩のほうから現われて、こちらの三人をとり巻いた。新八は畑姉弟をうしろに庇った。虎之助は姉にしがみついた。
「こんな処でなにしている」と侍の一人が云った。
小者たちが左右から提灯をさしつけた。呼びかけた侍は三十歳ばかりで、固肥りの小柄な男だった。声は低く、穏やかであった。
「私は、私たちは、――」
新八は吃った。すると侍が宇乃に云った。
「そちらは――どのの御姉弟だな」
「ええそうです」と新八が吃りながら云った、「そして私は、宮本の新八です」
侍は宇乃を見、新八を見た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「私は原田家の村山喜兵衛という者だが」とその侍は新八に云った、「こんな時刻にこんな処でなにをしているのだ」
「私にはわかりません」新八はふるえながら云った、「私は兄に云われて、客が二人来たのですが、兄は私に畑さんへ知らせにゆけと云ったのです、畑さんへ知らせて、それから浜屋敷へゆけと云われたので」
「こんな時刻にか」と村山喜兵衛が云った、「こんな時刻に御門を出られると思うのか」
「不浄門から出るつもりでした。不浄門に兄の知っている人がいるものですから」
「いったいそれは、――」ともう一人の侍が云った、「それはどういうことだ、なにがあったのだ、なんのために浜屋敷などへゆくのだ」
「わかりません」と新八はまた吃った、彼の声はいまにも泣きだしそうに聞えた、「兄のところへ客が来たのです、私にはわかりませんけれど、なにか大変なことが起りそうでした、兄のようすではなにか尋常でないことが起るように思えました」
「矢崎、――」と村山喜兵衛がもう一人の侍を見た。矢崎という若侍は頷ずいて、小走りに向うへ去っていった。村山喜兵衛は新八に云った。
「こちらへおいでなさい」
「どうするんですか」
「いまようすを見にやったから、どんなぐあいかわかるまで、向うで待つがいいだろう」
村山喜兵衛は虎之助のほうへ歩みよった。
「坊、いっしょにおじさんのうちへゆこう」
虎之助は姉を見た。喜兵衛は蹋んで云った。
「抱していってやろう」
「歩いていく」と虎之助は云った。
村山喜兵衛は、三人を、自分の小屋へつれていった。それは、宿老原田甲斐の住居に附属する、長屋の一と棟であった。三人は部屋へあがった。新八はひどく昂奮していた。顔色もまっ蒼だし、唇も白く乾いて、そうして、絶えずぶるぶると軀をふるわせていた。燈のあかりでそのようすを見て、宇乃はまた自分はしっかりしていなければならない、と思った。
「おうちへ帰ろう」
虎之助がそっと云った。宇乃は弟の背中をさすった。
「おとなしくしていてね」
「おうちへ帰ろう」
「そんなことを云わないの、もうすぐお母さまが迎えにいらっしゃってよ」
「お母さまが来るのか」
「ええ、いらっしゃるわ」
村山喜兵衛は戸口にいた。虎之助が云った。
「お母さま、ほんとに、迎えに来るのか」
「そうよ、だからおとなしく待ってるのよ」
「泣かないでか」
宇乃は聞き耳をたてた。

戸口にいた村山喜兵衛が、戸口から出ていった。矢崎という侍が戻ったらしい、小屋は狭いので、戸口の外で二人の話すのが、宇乃の耳にもあらまし聞えて来た。宮本新八は立とうとした。彼にも聞えたのか、それとも聞くために出ようとしたのか、立ちかけて、宇乃の顔を見た。

宇乃はそっと首を振った。新八はそのまま坐った。

「二人とも斬られたって」

戸口の外で、村山喜兵衛が云った。

「どちらもです」

矢崎舎人が云った。彼は喜兵衛よりずっと若く、まだ二十一歳であった。

「宮本又市も畑与右衛門も斬られました、畑では妻女も斬られたそうです」

「妻女まで斬った」

「邪魔をしたので斬られたということです」

「なに者が斬ったのだ」

「わかりません」と矢崎舎人が云った、「畑どのへ来たのは三人、宮本へ来たのは二人、どちらも家人の知らない顔で、名もなのらなかったといいます」

「意趣も云わずにか」

「いや、上意討だと云ったそうです」

「上意討だって、――」と村山喜兵衛が訊き返した。

「たしかに、両家ともそう云ったといっています」

「ばかなことを」と喜兵衛が云った、「殿は昨日、御逼塞になった、お上といえるのは御幼君だけだ、まだお二歳の亀千代さまが、そんなことをお命じになるわけはない」

「かれらはそう申したということです」

「これは穏やかでないぞ」と村山喜兵衛が云った、「昨日の今日、上意を僭称してこんな事が起るのは尋常ではない、おれはすぐ御家老に申し上げよう、あの三人をたのむぞ」

「承知しました」

「誰が来ても渡すな」

「承知しました」と矢崎舎人が云った。

村山喜兵衛はそのまま、原田家の住居のほうへ去った。部屋の中で、新八と宇乃はこれを聞いた。全部ではないが要点は殆んど聞きとれた。新八はまた宇乃を見た。宇乃はしずかな動作で、そっと弟の肩を抱きよせ、そうして、なだめるように云った。

「そうよ、泣かないでね」

虎之助は姉を見あげた。彼はすっかり眠そうな顔をしていた。

一、女客

七月二十五日の早朝。

原田甲斐宗輔は、自分の居間で手紙を書いていた。彼は六尺ちかい背丈で、色の浅黒い、温和な顔だちをしている。濃い眉はやや尻あがりであるが、静かな色を湛えた眼は尻さがりであった。おもながで、額が高く、その額に三筋の皺があり、その皺が四十二歳という年齢を示しているようであった。甲斐は黙っていると四十五六にみえる。彼

はあまりものを云わない、たいていのばあい黙って、人にしゃべらせている。話しをするときにも饒舌ではないし、決定的な表現は殆んどしなかった。彼は稀にしか笑わないし、それも声をあげて笑うようなことはない。一文字なりの、かなり大きな唇と、その尻さがりの穏やかな眼で微笑するくらいであるが、眼尻に皺のよる眼のなごやかな色と、唇のあいだからみえるまっ白な歯とは、ひどく人をひきつける。そんなとき彼は、三十四五にも、また、三十そこそこのようにも若くみえた。

甲斐は手紙を書いていた。机は北向きの窓の下にあり、あけてある窓の外に、矢竹が茂っていた。時刻は五時。戸外はかなり濃い霧で、矢竹の葉はびっしょりと濡れ、そよとも動かず、重たげに垂れていた。

——自分が江戸へ来たのは、去年の六月だから、この五月が御番あけであった。

甲斐はそう書いていた。

——御番があけて帰国したら、おめにかかって申上げるつもりだった。しかし御承知のような大変が起って、まだしばらくは帰国ができないようである。そこで、こんど里見十左がくにもとへ使者に立つというので、それに托して近況をお知らせする。

甲斐はそう書いた。彼が手紙を書いている居間の、ひと間おいた向うの座敷から、高い話し声が聞えて来る。一人は伊東七十郎であった。そのよくとおる、傍若無人な声で、伊東七十郎だということはすぐにわかった。

「いったい、なんだって決闘なんか申し込んだんだ」と七十郎の云うのが聞えた。

「このおれに意見をしおった」と相手の云うのが聞えた。

それは里見十左衛門の声であった。その声には、実直で頑固な性分がよくあらわれていた。

「へえ、あの新参者がか」

「あの新参者がだ」と十左が云った。「知ってのとおり、おれは堀普請の目付役をしておる、坂本も相い役だったが、——おれのところへやって来おって、小日向の普請小屋に、不取締りのことがあるから、注意するようにと申しおった」

「斬ってしまえばよかった」

「それでおれはどなった」

「おれなら、そのとき斬ってしまう」

七十郎のそう云うのが聞えた。甲斐は手紙を書いていた。いま甲斐の書いている手紙は、茂庭佐月に送るものであった。佐月は周防定元（現に国老）の父で、周防良元といい、やはり国老を勤めていたが、いまでは隠居して、くにもとの志田郡松山の館に、ひきこもっていた。

——七月十八日、酒井邸へ召されて、殿さま逼塞の沙汰があったこと、それから連日連夜の重臣会議や、十九日夜、坂本、渡辺、畑、宮本ら四人が刺殺されたことなどは、すでに御子息の周防どのから、使者で申上げたと思う。

甲斐はそのように書いた。ひと間おいた向うの座敷では、里見十左衛門がなお話していた。むきになったその声は、

こちらの居間までよく聞えて来る、十左はこう云っていた。
「おれはどなりつけた、おれは忠宗さま御代から二十余年、ずっと目付役を勤めておる、きさまのような新参者に意見されるほど、不鍛練な人間ではない」
「おれなら、その場で斬ってしまうよ」
「すると坂本八郎左、まっ赤になった、まっ赤になりおって、かように面罵されては男の道が立たぬ、と申した、そうか、とおれは云った、そうか、男の道が立たぬか、それなら男の道の立つようにしてやろう、とおれは云った、まず場所と時刻をきめよう」
「それで殿へ訴えたのか」七十郎のそう云うのか聞えた。
「やつめ、宿老に泣訴し、殿のお袖にすがりおった」
「それでおしまいさ」
七十郎が笑った。十左はさらに云った。
「おれは怒ったのではない、彼を怒らせたかったのだ、そうして決闘へもってゆきたかったのだ、それをあの八郎左め」
「即座に斬ればいいんだ」と七十郎が云った、「坂本はむろんのこと、畑も宮本も渡辺も、もっと早く斬ってしまえばよかった、そうして君側の奸を除けば、殿の御逼塞などということにはならなかったろう」
「そこもとは身軽だからそう云えるのだ」
「殿が御逼塞になってから斬るくらいなら、そのまえに斬るのが当然じゃないか」
「そこもとは身軽だから、そう簡単に云うことができる」
と十左が云った。すると七十郎が云った。
「ばかをいえ、もともと侍の身命は軽いものだ」
「おかしなことを云うぞ」
「なにがおかしい、義に当面すれば、しんめいを鴻毛よりも軽しとするのが、侍の本分ではないか」
「おかしなことを申す」と十左が云った、「それではおれが、身命を惜んだように聞えるぞ」
「これは一般論だ」
「いやそうではあるまい」
十左の声が高くなった。甲斐はちょっと筆をとめた。筆をとめて、十左と七十郎の高ごえを聞き、あるかなきかに頬笑んだ。
「二人よればすぐに始まる」と彼は呟やいた。
「困ったお国ぶりだ」
そしてまた手紙に向った。
——自分は筋目の家柄ではあるが、まだ評定役でしかないし、それに考えることもあるので、重臣会議にはなるべく出ないようにしている。聞くところによると、会議は殆んど一ノ関（伊達兵部少輔宗勝）さまの自由にされているらしい。御承知のように一ノ関さまは、酒井侯と昵懇（じっこん）のうえ、姻戚関係にもあることだし、酒井侯はまた幕府閣老のなかでも権勢のさかんな人であるため、一ノ関さまの発言には、誰も正面から反対ができないものである。
甲斐がそこまで書いたとき、向うの座敷の声がさらに高くなり、里見十左衛門のかん高くどなるのが聞えた。伊東

七十郎の声も高いが、それは平然として動じない調子をもっていた。

「こらえ性のない男だな、なにをそう喚くんだ」

と七十郎が云った。十左が喚き返した。

「そのもとはなんだ、そのもとは伊達家でどんな身分の人間だ、どれだけの身分でおれにそういうことを云うんだ」

「おれはどんな身分でもない」と七十郎が云った、「おれは小野の館の厄介者だ、隠れもない、おれは伊東新左衛門の厄介者だ、そんなことは誰でも知っているさ」

「その厄介者がおれにそんな口をきくのか」

「そう怒るな、まあそう怒るな、おれはつまりこう云いたかったんだ」

甲斐は書きつづけていた。

——自分が重臣会議に出ないようにしているのは、一門宿老の確執反目にまきこまれたくないのと、これが要(かなめ)という大事をしっかり見ていたいためである。

たとえば七月十九日夜の、四人刺殺の件にしても、誰が命じたものかいまだにわからない。刺客は十人ないし十一人らしい、だが姓名のわかっているのは、渡辺金兵衛、渡辺七兵衛、そして小者の万右衛門、という三人だけである。かれらは「上意討である」と云ったそうでこれは明らかに僭称であるが、重臣会議では、結局この件はうやむやに終るらしい。理由は、刺殺された四人は殿さまに放蕩をすすめ、それがもとで御逼塞という大事にいたらしめた奸臣だから、というのである。殿を誤まらせた奸物。それだけの理由で、いちどの審問もなく、ふいに襲って刺殺するという法はない。しかし会議の席で一ノ関さまはこう発言された。

——金兵衛らはよくやった。

それで重臣の人々は黙した。

——金兵衛らはよくやった。

一ノ関さまのその一と言に、誰も異議をさしはさむ人がなかった。坂本ら四人は討たれ損、刺客どもの責任は不問。そして宿老の一人は云った。

——詮索すればなにが出てくるかわからないし、こんな事で悶着を起すときではない。

この点に重要な問題がある。自分がいま一例として挙げたこの件にこそ、一門宿老の複雑な関係と、それが深い禍根をなしていること、また、ひいては綱宗さま逼塞という大事にも及んでいることの、もっとも端的なあらわれであると思う。

甲斐がそこまで書いたとき、次の間でひくい咳ばらいをし、申上げますという声が聞えた。

甲斐は「うん」といった。

襖をあけたのは、家扶の堀内惣左衛門であった。甲斐は筆をとめて振返った。

「湯島がみえました」

と惣左衛門が云った。甲斐は黙って惣左衛門の顔を見た。惣左衛門は云った。

「おくみどのでございます」

「いまなん刻だ」
甲斐はごく僅か眉をしかめた。すると額の皺がはっきりあらわれた。
「やがて六時になります」
「用を聞いておいてくれ」
と甲斐が云った。惣左衛門は当惑したように云った。
「おめにかかりたいと申しておられます」
「用を云わないのか」
「おめにかからなければ、と申しておられます」
甲斐は窓のほうへ眼をやり、それから云った。
「では待たせておけ」
惣左衛門は襖を閉めて去り、甲斐はまた書き継いだ。
——宿老の人達の、十余年にわたる権勢あらそいは、現に貴方の知っておられるとおりである。お国びとの忠誠に疑いはないが、その性の頑固一徹で、我執の激しさ、利己心の強さはかくべつである。そのために排他的な徒党がうまれ、それが離合集散をくりかえし、反目と誹謗がいりみだれて、事が起っても、殆んどその是非の判断がつかないようなありさまであった。さらにそこへ、兵部少輔宗勝という人の存在が、大きく、重くのしかかって来た。これが宿老から家中一般の不和反目を、いっそう複雑にしたことは事実で、なにか事が起るたびに、その弊害のはなはだしさが表面にあらわれる。こんど里見十左衛門が使者に立つのは、家督の君を選ぶために、在国の一門一家重臣に「入れ札」を求めるわけであるが、これまた一ノ関さまの主唱であり、異議なく一決したものであった。
——ここをよく記憶しておいてもらいたいのである。
甲斐はそうつづけた。
——一ノ関さまの存在が、このように重くなったのは、御先代（忠宗）の御他界このかたである。御他界のおり、みまいに来られた水府（水戸頼房卿）が、「つな宗どの若年なれば、兵部どのにはよくよく家中の取締りをたのむ」と仰せられたそうで、これが一ノ関さまの立場を決定的にした、といってもよいであろう。古内主膳（故国老）どのが御先代に殉死されるとき、「兵部さまのことが気がかりでならない、よくよく注意せよ」と遺言されたが、それから僅か二年、どうやらすでにその懸念があらわれはじめたように思われる。
——これまで自分は、幸いにして紛争の局外にいることができた。これからもできるだけ局外に立って、事のなりゆきを見まもっているつもりである。世継の君が決定しても、それで一藩が平安におさまるとは思えない。不測の事の起る心配は、むしろそのあとにあると考えられるが、これについては、帰国のうえで申上げることにする。
甲斐はそこで筆をとめた。彼は初めから読み返し、結びの挨拶を書くと、筆を措いて、その手紙を封じ、それから、硯箱の脇にある鈴を取って振った。
次の間に答えがあり、矢崎舎人が襖をあけた。
「里見どのをこれへ」と甲斐が云った。
舎人が承知してさがると、すぐに里見十左衛門が来た。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com